The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	主題として機能する格助詞表示の名詞句
Author(s)	堀川, 智也
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2009, 1, p. 75-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

主題として機能する格助詞表示の名詞句

堀　川　智　也
HORIKAWA Tomoya

Abstract:

Noun Phrase with a Case-Marking Particle Functioning as a Topic

When a noun phrase is considered a prototypical topic, the noun phrase should fulfill the following two requirements. (i) The noun phrase should be an object explained in the following part. (ii) Between the noun phrase and the following part, there should be a difference in the standpoint of the expression. It becomes independent whether to meet this requirement whether a noun phrase is marked with “wo”. From this viewpoint, the noun phrase marked by a case marking particle “wo” or “ni” might become a prototypical topic. In this paper, I discuss the semantical and syntactical characteristic of such a topic.

Keywords：topic, topic-comment structure, case-marking particle, topic marked by a case marking particle
キーワード：主題，主題解説構文，格助詞，格助詞表示の主題

§１　言語の線条性と「主題」

言語の最も基本的な制約として，線条的という性質がある。線条的とは，音声言語であれ文字言語であれ，あらゆる表現は時間の流れに沿って一次元的に形式を順々に並べていかざるをえないということである。それは音声言語でも文字言語でも同様で，同時に複数の音声を発することもできなければ，二重に文字を重ねて書くこともできない。ある部分を先に表現しある部分を後に表現するというように，何らかの前後関係をもって表現しなければならないのは，言語の持つ最も基本的な必然的制約である。例えば，「（ほらほら）鳥が飛ぶ」「（あっ）犬が走っている」という文においては，世界の認識として生起した事態をまるごと一元的に把握している。つまり「鳥」というモノの認識と「飛ぶ」というコトの認識は同時であり，双方がばらばらにあるわけではない。しかしそれを言語で表現する際には，「鳥」と「飛ぶ」を同時に表現するわけにはいかない。「鳥」と「飛ぶ」を同時に発音したり，「鳥」と「飛ぶ」という二つの文字を二重に書いたりはできないのである。

あるいは，その一元的事態を「鳥」と「飛ぶ」という二つの概念の結合で表現するのではなくその概念を一語でまるごと表現するような語彙（「鳥飛び」にあたるような語彙）があれば，それを用いるのが理想かもしれない。しかしそれは実際には不可能であり，概念と概念の結合として表現するしかない以上，どちらかを先にどちらかを後に言わなければならないのは言語の必然的制約である。さらに，構成要素が三つ以上になった場合には，当然，それらをどのような順序で組み合わせて関係を構成していくかが問題になる。四則計算「４＋６÷２」において「７」を正答とし「５」を誤答とするのは，前から順に演算を行うのではなく，加減より乗除を先に行うというルールに基づくからである。これは最も原初的な意味でのシンタクスのルールであるが，言語においても，線条性という制約をもつ以上，同様に複数の構成要素の組み合わせ方に関するルールがある。言語学においてシンタクスという分野があるのは言語が線条的である以上必然なのである。

あらゆる言語表現は何らかの前後関係をもってしかありえないとしても，言語の線条性はやむをえない制約でありできることなら前後両項を同時に重ねて表現したい場合もあれば，むしろ言語の線条性を積極的に表現の中で生かす場合もありうる。例えば「（あっ）鳥が飛んでいる」という表現はやむなく「鳥が」を先に「飛んでいる」を後に表現しているに過ぎず，この前後関係はきわめて消極的な意味での線条的分節に過ぎない。一方，「クジラは，哺乳類に属する」「余ったおかずは，冷凍室に入れました」では「クジラ」「余ったおかず」がまず課題として設定された上で，それに対する解説を求めるという気持ちが働く中で，後続部分が続く。この表現においては前半部と後半部が「課題提示部分」とそれに対する解説である「伝達主要部分」というように表現上の立場が大きく異なる。この場合，課題提示部分でいったん切れ目があり，その後に伝達主要部分が続いて全体としてまとまりのある内容を表現することになる。このような表現においては，言語の線条性を制約というよりむしろ積極的に活用して，前後間に大きな切れ目，断裂があることを明示し，前後で表現上の立場が異なることを明確にしたものといえる。

つまり言語の線条性に関し，やむをえない制約でありできることなら前後両項を重ねて表現したいような場合もあれば，むしろ線条的であることを積極的に活用し，前後両項を立場の異なる二つに積極的に分割した上でそれを結ぶ表現もありうる。後者の場合は，すべての表現が必然的，根源的に持つ意味での線条的制約という次元を超えて，積極的に前後の表現上の立場の違いがあり，そこに断裂があることを表現する。

さて，「主題（ないし題目語）」とは今述べた第二の表現スタイル，即ち，積極的に表現上の立場の部分間落差をつけて前後両項の結合として語る表現スタイルをとる際の前提的基盤項目のことである[1]。しかしながら，表現上の前提部分がすべて「主題」といえるかといえばそうではない。「きのうは彼女とディズニーランドに行った」「北海道からはジャガイモが届いた」の下線部は後続部分の説明の対象になっているモノではないので，典型的

1　本稿では「主題」と「題目語」という二つの用語を特に区別せず，先行文献を引用する場合以外は「主題」という用語で統一することとする。

な主題とはいいにくい。そこで「典型的な主題」の要件としては,「表現上の落差構造」に関する要件だけではなく，その成分の文中における意味的立場を考慮に入れるべきだという考えが出てくる。尾上（1995）が「典型的な題目語」の要件の中に「後続部分の説明対象」でなければならないという一項を入れたのはこのような要請を踏まえたものだと考えられる。

本稿でも,「表現上，後続部分との間に断裂があること」という「断裂要件」と,「意味上，後続部分の説明対象（または処置課題）であること」という「意味要件」の二つをともに満たすことが,「主題」であるための二つの大きな要件だと考えるが，このことの意味を，主題論の研究史の中でとらえてみたい。

§２　主題論の系譜

従来，日本語文法において主題論はハとガの使い分けという形での議論を含めて実に多様に展開されてきた。しかし，主題という成分をいかなるものとして把握するかについて実は研究史の中で大きく異なるいくつかの立場があり，相互に相当に隔たったものを前提としているにもかかわらず,同じ「主題」という用語が用いられている。本稿ではまずは,主題論をめぐる複数の大きく異なる見方を整理しておきたい。

まず第一の見方は，主題とは一つの文の中で表現上，文頭におかれて「何らかの説明がなされる対象」であるという見解である。これは「その対象について何らかの説明が与えられる部分」と一対となる概念であるが，これらはプラーグ学派の機能主義の伝統の中で「トピック－コメント」「テーマ－レーマ」「提題－結題」などさまざまな用法を用いて論じられてきた概念である。ここではあくまで一つの文を立場の異なる二つの部分に分けた上で,その二つの部分の結合として文が構成される表現において,その前半側,つまり「説明すべき対象」のことを「主題」と見る。

（１）　田中さんは昨日タイから帰国しました。
（２）　余ったおかずは冷蔵庫に入れました。

これらの文において「田中さん」「余ったおかず」は説明が与えられるべき対象であり,後続部分はそれについて何らかの説明をする部分である。言い換えれば，前段はそれについての解説が欲しい「問い」,後続部分はその問いに対する「答」といってもよい。つまり,文全体が分割できない一枚岩からできあがっているのではなく，明らかに立場の異なる二つの部分の結合として文ができあがっている場合に，その前半部分のことを「主題」というわけである。

もちろん，すべての文がこのように「立場の異なる二つの部分の結合」として構成されるわけではない。§１でも挙げたように,「（ほらほら）鳥が飛ぶ。」「（あっ）犬が走っている。」のような場合，全体として一元的な事柄であり，前後に表現上の立場の落差をつけて語るのではなく,「主題」をもたない表現といえる。

第二の見方は,「前提－焦点」という切り口で一文を立場の異なる二つの部分に分ける見解である。これは一文を「前提とされている情報」と「前提とされていない情報」に分け，前者を「前提」，後者をそれに対する「焦点」と名付け，前提部分の名詞句を「主題」とみる見方である。例えば,「その会議に誰が出席しましたか？」という問いに対して,「その会議に出席したのはＡ部長とＢ課長です」と答える場合，前半部「その会議に出席したのは」が前提部分なので「主題」であり, 後続部がそれに対する焦点である。先にみた「トピック－コメント」という観点（一文を「説明対象」－「説明内容」に分ける観点）と,「前提－焦点」という観点はそれぞれ異なる観点である一方，その共通性に着目する必要がある。その共通性とは，あくまで一つの文の中において，表現上，他の部分とは異なる特別な地位にある成分のことを取り出して「主題」と呼ぶという点である。あるいは，表現上立場が異なる二つの部分の結合として構成されるタイプの文を取り上げようとした点で共通だといってよい。

もちろん，第一の見方でいう「説明対象の部分」と，第二の見方でいう「前提部分」は必ずしも一致しない。そもそも語順上，説明対象は文頭におかれるのが普通であるが，前提項目は文頭におかれるとは限らない。例えば,「きのうのパーティに誰が来ていましたか？」という問いに対し,「田中君と川口さんが来ていました」と答える場合，前提部分は「来ていました」であり文頭ではなく，文頭の「田中君と川口さん」は焦点部分，即ち伝達主要部分である。即ち,「説明対象－説明内容」と「前提－焦点」は一致しないことも珍しくはないのである。

「主題」をめぐる第三の見方は，第二の見方における「前提とされている情報」とは何かをとらえようとした時，それは一文中の問題ではなく，先行談話・テキストによって決定されるという考えに基づく。これが主題をめぐる第三の見方である。つまり, 主題とは, 一文を超えた次元，談話・テキスト的次元の概念としてとらえるべきものだという見方である。この見解は，海外でのテキスト言語学の影響を強く受けていると考えられる。例えば，ダネシュ（Danes 1974）は，文をテーマとレーマの結合体と考えるプラーグ学派の考えに沿って，談話展開の中で何がテーマになるかを検討した。談話の主題が文の主題と深い関係があるという見解は，ここから出てくる。さらにギボン（Givon, ed.1983）はテキストにおける主題連鎖という観点を取り入れて主題を論じた。このような流れの中で,「主題」とは談話上の概念であり，先行談話において何らかの意味で既出の成分が「主題」になる，という考えが出てくる。もちろん先行談話において「既出」とは正確にはどう規定できるものなのか，そもそも談話の主題とはいかなる形で規定されるのか，また談話の主題が無条件で文の主題になるのか，など種々の問題があるが，談話・テキスト的な概念として「主題」を日本語研究の中に本格的に持ち込み，既知・未知という観点で整理したのは，大野（1978），北原（1981）である。

このような流れの中で，海外のテキスト言語学の成果を積極的に日本語研究の中に取り込んだ日本語の主題研究に，砂川（2006），庵（2007）があり，文の主題は談話の主題と深い関係があるという立場にたった議論を展開している。ところで，北原（1981）がこの

系譜のさきがけとみなす松下（1930）であるが，実はそうではないことが尾上（2004）で指摘されている。松下は題目Ｘを「既定不可変で選択不自由なもの」，後続のＹを「未定可変で選択自由なもの」と説明しているが，これはあくまで一文の中での後続部分との関係における「Ｘハ」の伝達上の立場をいったものであり，談話・テキスト上で既出要素といっているわけではない。また，Halliday（1985）も主題（thema）とは一文の中での前提基盤項目を聞き手に示す成分であり，談話・テキスト的な概念とはみていない点で注目に値する。

ところで，以上みてきたように，新情報，旧情報という用語は，第二の見方，第三の見方の両方で使われることがあり，この用語を使う研究がすべて談話・テキスト的概念として「主題」を考えているかというと決してそうではないことには十分留意する必要がある。古く Mathesius（1927）にさかのぼり，古い情報を表わすのに theme という用語が，新しい情報を表わすのに rheme という用語が用いられているがこれはあくまで一文中での問題である。この観点は Firbas（1964）に受け継がれた後, 久野（1973）が, 日本語の「は」と「が」の使い分けにこの観点を導入したのである。しかしここで留意しなければならないのは, 久野（1973）および最近の高見･久野（2006）を丁寧に読むと, 久野の考えは,「ハ」の説明に用いる基準と「ガ」の説明に用いる基準は別であり，同一次元で「ハ」と「ガ」の相違をみているのではないことである。

まず久野（1973）では,「「ハ」でマークされる日本文の主題は総称名詞句か，文脈指示の名詞句でなければならない。（下線は堀川）」（pp.29）とも述べていることも確かであり，このことが久野を第三の見方にたつ論者とみなす余地がうまれ，混乱を引き起こしているといえる。これについて，高見・久野（2006）ではより具体的に整理され,「ハ」でマークされる名詞句は「指示対象既知」名詞句でなければならないという。この場合の「指示対象既知」とは具体的には （i）すでに会話に登場した人物や事柄，つまり，現在の会話の登場人物･事物リストに登録済みのものを指す名詞句，（ii）会話に登場していなくても，話し手，聞き手，会話の場所に密接にむすびついているもので，その指示対象が明らかなもの（例：私，君，君の奥さん，家，家内，太陽，月），（iii）話し手，聞き手の間で了解済みの概念を表わす名詞句（例：人間，動物，国家，民主主義）に限られるという。このうち（i）は先行談話に関連があるが，（ii）（iii）は明らかに先行談話とは別次元で決定されるものである。

ここでいう指示対象が未知か既知かという概念は,「新情報」「旧情報」という概念とは全く別であることが明確に述べられている。ここで「新情報」「旧情報」とは先行文脈から予測できない情報かできる情報か，という「先行文脈」にかかわる概念だととらえた上で,「ガ」は主文主語が「新情報／重要度が高い情報」を表わすと規定している。「新情報」とは先行文脈から予測できない情報という意味であり「指示対象未知」という意味ではない。つまり,「ハ」は指示対象既知という概念装置で説明されているがこれは先行文脈と直接は関係ない概念である一方,「ガ」は「旧情報」という先行文脈との関連で規定できる概念で説明されており，両者は別次元で規定されていることになる。

以上みたように，久野（1973）以来，久野は「ハ」の説明に用いる概念装置と，「ガ」の説明に用いる概念装置は別次元のものを使っている。「ガ」の説明には「先行文脈から予測できるか否か」で「新情報」と「旧情報」を分けたのであるが，これは，「ハ」の説明に用いられた「既知」とはあくまで別次元であり，「ハ」は先行談話の中で旧情報を表わすとは久野は全くいっていないのである。にもかかわらず，「ハ」の説明の（i）に限って言えば「文脈上既出すなわち旧情報」と読み替えられる余地があったため，「ハ」と「ガ」を同一次元の尺度の説明原理でとらえようとする議論の中で，主題を談話・テキスト的概念としてみなす大野（1978）などの論者があらわれたのだと考えられる。

ところで，以上述べてきた流れとは全く別の系譜での主題論として，古代語の係り結び論に端を発する系譜がある。これは森重（1955）における「論理的格関係」と「係り結び的断続関係」という区別に始まるといってよい。例えば，

（3） 昨日買ってきたおかずは，冷蔵庫に入れました。

という文は，「昨日買ってきたおかず」で表現の流れをいったん切り，息継ぎをおいた上で，それに結び付けられるべき内容として後続部分を持ち出すという表現である。あるいは「昨日買ってきたおかず」を問題にすべき課題として表現の流れの中で特別な位置においた後，それはどうなったのか，という問いに答えるのが後続部分だということもできる。このように，前半部と後半部の間に大きく断裂があり，表現上の立場が大きく異なる二つの部分の結合として語られる表現スタイルを森重にならって「断続関係」と呼ぶことにする。「断続関係」とは，前後で「断裂」がありつつも両者が一連のものとして繋がる，という意味で「断裂」と「接続」の両者を併せ持つ意味の用語として用いられたものである。この系譜が重視する，一文の中での表現上の立場の違いを重視する立場は，先に見た第一・第二の見方との共通性を持つのに対し，第三の見方とは大きく異なると位置づけることができるだろう。

この系譜で行われた主題研究としては，尾上（1981,1995,2004），丹羽（2006），堀川（2005）などがある[2]。菊地（1995）など菊地の一連の「は」構文研究は，断続関係は重視しないものの，後続の伝達主要部分がいかなる意味で主題についての情報として機能するかを重視し談話上の要因を見ない点ではこの立場に近く，主題を談話・テキスト的概念とは考えない点でやはり共通である。

第一の見方と第二の見方はともに一文中の概念として「主題」をとらえるという点では共通している。第三の見方はもともとは第二の見方のヴァリエーションとでもいうべきものであったが，第二の見方から一人歩きし，一文中の問題ではなくなった時点で，第一の見方とは最も異なる立場になったといえよう。つまり，ダネシュ・ギボンから大野・北原

2　この系譜では用語法として「主題」よりも「題目語」ないしは「題目」という用語が好まれることもあるいは特徴として挙げられるかもしれない。

を経て砂川･庵に至る第三の見方に立つ系譜と，それ以外の系譜は大きく異なるといえる。第一の見方と第二の見方は共通性があり，第二の見方と第三の見方はそれなりに通じる部分がないとはいえないが，第一と第三の見方は大きくかけ離れたものになっているといってよい。

このことは，益岡（2004）が以上の学史とは直接には独立に提示している「文の主題」と「談話の主題」という区別とも響きあう。益岡（2004）は，日本語の主題には文レベルの主題と談話・テクストレベルの主題があり，前者は属性叙述文をベースにしているのに対し，後者は事象叙述文が談話･テクスト上の要請によって主題化されると主張している。本稿の整理に沿って言えば，属性叙述文，例えば「雪は白い」の文は，「雪」という説明対象と，「白い」という説明内容の結合によって構成されており，この時の「雪」はまさに第一の見方による「主題」である。一方，「今年北京でオリンピックがあった。オリンピックに参加したＡ選手はみごと銅メダルを獲得した。」における「オリンピックに参加したＡ選手」は先行発話に関連する対象なので「主題」になっていると考えればこれは第三の見方による主題，即ち談話・テクストレベルの主題，ということになろう。

しかしここで気をつけなければならないのは，第一の見方での「（説明対象としての）主題」，第二の見方での「（前提項目としての）主題」は，談話上「旧」とは限らず，第三の見方での「主題」とは一致しないことである。つまり談話の主題でなければ文の主題になれないわけではないのである。日本語の「は」は旧情報を表わし，「が」は新情報を表わすという説明が日本語研究の中に漠然ととり入れられている。しかしここでいう「新旧」とは，第一・第二の見方においては一文中での立場の異なりであるのに対し，第三の見方では先行談話において何らかの意味で既出であることが「旧」ということであり，これは第一，第二の見方における「主題」とは一致しない。表現上の前提項目として重要なことは，話し手と聞き手が手と手を結び合ってこの項目を前提基盤項目にして話をはじめましょう，という合意ができることであり，その合意ができる項目であれば主題になりうるのである。聞き手と話し手の間で合意できるモノなら，先行文脈で言及されずとも表現上の前提基盤項目に置くことは可能である．もちろん，先行文脈で言及されているモノは合意可能なものになりやすく主題になりやすいことは確かであるが，先行文脈で言及されることが絶対に必要なわけではない。つまり，談話上既出という条件は主題であるための十分条件ではあるが必要条件ではないのである。

いかなる項目が主題に選ばれるのか，言いかえれば，どういう項目が「前提部分」に選ばれるかを明確にしたいという問題意識をもって主題を考えた場合，いかなる項目が話し手聞き手間で基盤項目として合意がなされるかを完全に予測することはできず，いわば言語研究の枠外に出てしまう問題になる。尾上（2004）が指摘するように，例えば，東京在住の人同士の会話なら談話の冒頭で「新宿のデパートは・・」というのは許容される可能性が高いのに対し，九州の人同士の会話なら一般には不自然であろうが，それとて絶対的に決定されるものでもない。その点で，談話上既出という説明装置は，主題になりうることをかなり明確に予測できる装置のため，「いかなる項目が主題になるか」という問題意

識から出発した場合，談話上の概念として主題を考える見方が出てくるのもゆえなきことではなかろう。

§３　格助詞表示の主題

§１で述べたように本稿では日本語の主題を，「表現上の立場の部分間落差をつけて前後両項の結合として語る表現スタイルをとる際の前提的基盤項目」という「断裂要件」と，その項目が後続部分の説明対象でなければならないという「意味要件」の二つを満たすものと考えるが，この要件を満たすかどうかと，その名詞句が「ハ」で表示されるかどうかとは二重の意味で一対一に対応しているわけではない。一般に，この要件を満たす名詞句は「ハ」で表示されることが多いものの，「ハ」で表示される名詞句のすべてがこの要件を満たすわけではなく，一方，「ハ」を用いない場合（助詞なしの場合，あるいは「ハ」以外の助詞で表示される場合）でもこの要件を満たす場合がある[3]。

まず第一に，「ハ」で表示される名詞句のすべてが後続部分との部分間落差をもつとはいいがたい。例えば，

（４）　松原遠く消ゆるところ 白帆の影は浮かぶ（文部省唱歌「海」）

において「白帆の影が浮かぶ」ことは全体で一元的なことがらであり，「白帆の影」をまず認識し表現上の前提基盤項目においた後，それが浮かぶ，ということを表わすものではない。つまり「ハ」があっても前後間に断裂はないケースなのである[4]。
第二に，もちろん「ハ」があれば積極的に断裂があることを表現できることが多いが，「ハ」がなくとも断裂があることを表現することが可能な場合がある。

（５）（ほらほら）あの猿，けがをしているみたいだね。

動物園で，話し手が聞き手に向かって一匹の猿を指さしながらこのようにいった場合，現場的に，まず「あの猿」に対し聞き手の注目をうながし，話し手・聞き手が共通に「あの猿」に注目する環境を整えた上で後続の伝達主要部分がおかれる，という表現スタイルである。即ち，「あの猿」を表現上の前提基盤項目となる条件を整えた上で後続部分が続くのであり，明らかに前後間に断裂がある。この場合，前後に明らかに表現上の立場の落差はあるが，「ハ」は用いられておらず，助詞なしで断続関係が表現されている。
さらに注目すべきケースとして，「ハ」でも助詞なしでもなく，格助詞がついた名詞句が文頭にきた次の例はどうだろうか。

3　丹羽（2006）は「～って」「～について言えば」「～なら」による題目提示について論じている。
4　例文（4）のような「ハ」について，尾上（1995）は「額縁的詠嘆」と名付けている。また堀川（2007）ではこのような「ハ」について主に万葉集の用例を中心に分析している。

（６） 昼食を，おにぎり一個で済ませた。

この場合,「昼食に関して，どういう形にしたのか」という問いだと考えることができ,「昼食」は一種の課題，即ち前提基盤項目である。その「昼食」を課題提示した後，それに対する答として後続部分があるのであり，明らかに前後に断裂がある。しかも,「昼食」は後続部分で語られる部分の説明の対象になっていることはいうまでもない。主題とは,前後に表現上の落差構造があること，および，後続部分の説明対象になっていること，という二つの要件を満たすことだと考える本稿の立場では,この表現は,文頭の名詞句が「ハ」ではなく「ヲ」という格助詞で表示されているにもかかわらず,「昼食」が表現上の前提部分であること，それが後続部分の説明対象となり後続の伝達主要部分においてその解説が与えられている点において，この二つの要件を満たしており，実質的には主題といってよい。そこで本稿ではこのように「ガ」以外の格助詞で表示されかつ文頭におかれた成分で実質的に主題相当の役割を果たしている成分，すなわち「格助詞表示の主題」が存在することを積極的に認める立場にたちたい。

§１で述べたように，言語の線条性という原則により，言語表現はすべて根源的な意味で何かある項目を先に，何かある項目を後に言わなければならない。とはいえ，その前後関係が鋭く意識される場合とさほど鋭くは意識されない場合がある。一般にガ格項（主語項）が文頭に来る場合，基本語順と重なり合うため，ガ格項が特別な動機をもって文頭におかれたという感覚は薄く，結果として前後が鋭く対立しているとは感じにくい。一方,ヲ格項，ニ格項など，ガ格項以外が文頭に来る場合，何らかの特別な動機が働いていると感じられるが，あえて有標の語順をとる動機はさまざまにありうる。

Ａ　昼食を太郎はおにぎり一個で済ませた。
Ｂ　エルメスのバッグを家内がパリで買ってきた。

Ａは,「昼食」が一種の課題，後続部分はそれについての解答提示部分であり，前後間で表現上の立場の落差構造がある。一方Ｂはそれと異なり全体で一元的な情報であり,「エルメスのバッグ」をあらかじめ表現上の前提基盤項目においた上で後続部分が続く表現ではない。つまりヲ格項が文頭に来てはいるが後続部分との表現上の立場の落差はない。両者が異なるタイプであることは，次のように，主語項（動作主項）の表示に関し，異なるふるまいをみせることからもわかる。

（７） ａ　昼食を太郎はおにぎり一個で済ませた。
　　ｂ??昼食を太郎がおにぎり一個で済ませた。
（８） ａ　エルメスのバッグを家内がパリで買ってきた。
　　ｂ＃エルメスのバッグを家内はパリで買ってきた。

つまりAタイプは動作主（ガ格項）はハで表示する方が普通でガで表示すると不自然で特別な文脈でなければ許されないのに対し，Bタイプはその逆でハで表示すると，「エルメスのバッグ」を前提基盤項目とした上で強い対比の色が出る読みになり，元の文とは全く異なる表現の文になる。（＃は文法的ではあるが元の文とは意味が異なることを表す。）

以上整理すれば，ヲ格項，ニ格項などが文頭におかれる場合，後続部分との表現上の立場の落差を帯びるかどうかで大きく二類に分かれることになる。次に分類するAのみが前後に表現上の立場の落差を帯びるのに対し，BおよびCは帯びない。以下それぞれのタイプを詳しくみていきたい。

A　格助詞表示による主題タイプ

（9）　昼食を太郎はおにぎり一個で済ませた。

(10)　ヨーロッパにスペインとポルトガルだけ行ったことがある。

(11)　アルコールを水割り1杯だけ飲んだ。

(12)　たばこを高田さんは全く吸いません[5]。

このタイプは，後続の伝達主要部の中に，文頭のヲ格項，ニ格項を量的に限定する副詞表現がくることが特徴である。例えば，「水割り1杯」は「アルコール」の量的限定，「おにぎり1個」は「昼食」の量的限定である。量的限定とは部分が全体を含むものなので，これは「酒は日本酒がいい」「魚は鯛がいい」のような菊地（1995）が包含型と名付けた「は」構文と類似している。つまり「鯛」が「魚」に含まれるのと同様，「水割り1杯」は「アルコール」に含まれると考えることができる。菊地（1995）は，包含型の「は」構文として，

(13)　留学生は十人が来た。／留学生は十人を招待した。

のように「XはYが（を）Z」のYが数量の例を挙げているが，この場合数量詞に格助詞がついており名詞句扱いである。これに対し本稿でいう「格助詞表示の主題」とは，文頭名詞句が格表示されているが実質的には主題の要件を満たしており，かつ，数量限定を副詞扱いにした上で，文頭名詞句が伝達主要部分の動詞とヲ格またはニ格という格関係をも持つ場合だといえる[6]。この場合，「ヲ」または「ニ」で表示されていても前提基盤項目であることにはかわりがなく，「昼食<u>は</u>太郎はおにぎり一個で済ませた」のように「ハ」でおきかえても表現スタイルに変化はないことに留意する必要がある。この点が次にあげるBタイプとは大きく異なる点である。

5　(12) と同趣の例はつとに尾上（1981）に挙げられている。尾上（1981）は「タバコを，大山さんは吸はない」という例を挙げて，この時の「タバコを」がある意味で題目化されている，と述べている。

6　数量詞が名詞性と副詞性の両面を持つことについては，堀川（2000）で論じた。

「格助詞表示の主題」が実質的に主題といってよい理由の一つは今述べたように文頭のヲ格項，ニ格項を「ハ」で置き換えても不自然ではないことであるが，もう一つの理由として後続の伝達主要部中にある「ハ」（動作主項）が基本的に対比の色を帯びることが挙げられる。これは，以下にあげるＣタイプが後続の「ハ」が対比の色を帯びないことと大きく異なるポイントである。一般に主題－解説構文において，後半の解説部中に含まれる「ハ」は強い対比の色を帯びる。「象は鼻は長い」「カキ料理は広島は本場だ」などすべてそうである。「格助詞表示の主題」構文においては，動作主なしで「昼食を，おにぎり一個で済ませた」という方がどちらかといえば自然であるが，あえて動作主項を「ハ」で表示すると「昼食を，太郎はおにぎり一個で済ませた」のように通常，対比の色を帯びる。これは文頭名詞句が「ヲ」で表示されているにもかかわらず主題として機能していることのあかしであろう。

Ｂ　広義出現表現におけるヲ格項文頭表現

(14)　エルメスのバッグを家内がパリで買ってきた。

(15)　ベニスズメの幼虫を息子が拾ってきました。
（http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1117502136）

(16)　抜け殻ではない，セミの幼虫を息子がみつけました。
（http://smilekuukan.seesaa.net/article/103485386.html）

このタイプは全体として一元的な表現で，文頭名詞句があらかじめ前提基盤項目としておかれた後に後続部分が伝達主要部になるという表現ではない。このことは文頭のヲ格項を元の文と同義性を保ったままで「ハ」と置き換えることはできないことからもわかる[7]。

(14)’エルメスのバッグは家内がパリで買ってきた。

(15)’ベニスズメの幼虫は息子が拾ってきました。

(16)’抜け殻ではない，セミの幼虫は息子がみつけました。

元の文は文全体が一元的な表現なのに対し，文頭の「ヲ」を「ハ」でおきかえると明確に前後に表現上の立場の落差が生じる。つまり「エルメスのバッグ」が表現上の前提項目になる場合しか使えない。例えば，あらかじめ誰かがエルメスのバッグを買ってこなければならない状況において，「家内がパリで買ってきた」という場合や，家内がどこかでエルメスのバッグを買ってくることになっている状況で買った場所が「パリ」であることを伝達する場合などがありうる。この場合「このエルメスのバッグは家内がパリで買ってきた」というように「この」をつけた場合も問題なく許容される。これは特定の「エルメスのバッグ」であり，元の文における「エルメスのバッグ」が類概念であるのとは異なる。

7　なお，このタイプで文頭にくるのはヲ格項のみでニ格項など他の格項目のケースはない。

以上の説明で明らかなようにヲ格項をあえて文頭においた動機は，表現上，それを特別な地位において後続部分との間に部分間落差をつけるためではない。ではなぜ標準的語順をくずしてまでヲ格項を文頭にもってきたのであろうか。理由の一つは，この文が動作主の動作を表わすことに表現の力点がないことである。つまり，「家内が何をしたか」「息子が何をしたか」に情報の重みがあるわけではない。文全体が一元的な情報でいわば新たなモノ（エルメスのバッグ，ベニスズメの幼虫など）の出現そのことが重要な文である。つまり他動詞文ではあるが動作主性は低く広義に出現表現といってさえよいような文である。そのため動作主項が文頭におかれなくとも不自然ではないのである。理由の二つ目は，出現したモノの特殊性である。(15)(16) は実例であるが，ここで「ベニスズメの幼虫」「抜け殻ではない，セミの幼虫」はいずれもかなり特殊な，非常に特別な情報価値があるモノといってよい。このようなモノの出現を語る場合，それをあえて文頭に置くのは自然なことであろう。

もちろん，動作主をハで表示すると，特別に対比の色合いが出るが，それとともにこの場合，断裂がうまれ，「エルメスのバック」を表現上の前提項目とすることになり，元の文とは別種の表現スタイルの文となる。

(17)　エルメスのバックを家内はパリで買ってきた。（隣の奥さんはロンドンで買ってきた）

C　談話における結束性を持たせるのが動機の場合

(18)　わたしはひとり仏間へ入って過去帳を一枚ずつめくって六日のところを披（ひら）いた。その過去帳の一枚一枚の重さをわたしはまだ指の先に覚えている。（紀野一義『禅・現代に生きるもの』（ＮＨＫブックス））

(19)　新作が公開されるたびに日本にやってくるウィルだが，今回は例年とはスケールが違った。彼が会場に設置されたレッドカーペットに登場すると，会場に突然の嵐が吹き荒れるハプニングが。・・（中略）・・（ところが）会見場にウィルが姿を見せると，嵐がピタリとやむサプライズが。自然の脅威すら味方につけてしまうウィルのパワーにファンたちは驚きを隠せない様子だった。（映画『ハンコック』の宣伝チラシ）

(20)　淳子は突然，発作のようなせつなさが押し寄せてきて，思わず幼女を抱きしめた，おかっぱ頭に頬を埋めると，強い耳垢のにおいがした。これとは全く違う体臭を持つ人間のことを，淳子は思い出している。（三原（2008）からの引用：原文は林真理子の『短篇集』）

このタイプのヲ格項またはニ格項は，後続部分との表現上の立場の落差を帯びないこと（全体で一元的表現であること），後続部分の説明対象とはいえない点で主題とはいえないものである。このことは次の二つの特徴を指摘できることからもわかる。まず第一に，伝

達主要部分中の動作主項が「わたしは」「ファンたちは」「淳子は」のように「ハ」で表示されているにもかかわらず，対比の色を全く帯びないことである。第二に，先行するヲ格項・ニ格項の「ヲ」または「ニ」を「ハ」とおきかえることが難しいことである。

(18)’ ？その過去帳の一枚一枚の重さはわたしはまだ指の先に覚えている。
(19)’ ？自然の脅威すら味方につけてしまうウィルのパワーはファンたちは驚きを隠せない様子だった。
(20)’ ？これとは全く違う体臭を持つ人間のことは，淳子は思い出している。

このように文頭の「ヲ」または「ニ」を「ハ」に置き換えた場合，二つ目の「ハ」に強い対比の色が出る。ではなぜこのタイプでヲ格項・ニ格項がガ格項より先に表現されるのであろうか。それは，三原も指摘するように，先行文脈との結束性を持たせるためである。もし無標の語順でガ格項を文頭におくと先行文脈で示された内容との関係が薄れ，ばらばらのテキストに感じられる。ここであえてヲ格項・ニ格項を文頭におくことによって先行文脈とのつながりを明確に意識させることが可能になる。つまり，ヲ格項・ニ格項と後続部分（わたしはまだ指の先に覚えている・ファンたちは驚きを隠せない様子だった・淳子は思い出している）の間に表現上の立場の部分間落差をつけたいがためにヲ格項・ニ格項を文頭においたのではなく，あくまで先行文脈との結束性を持たせたいという動機で有標の語順をとったのである。後続部分中の動作主項がハ表示されているにもかかわらず対比の色を帯びないこと，ヲ格項・ニ格項を「ハ」でおきかえにくいことは，このヲ格項・ニ格項が主題としての特性をもっていないことのあかしであろう。先にみたＡおよびＢタイプは談話の冒頭でも使用することが可能で先行発話との結束性をもたせる動機はなくてもよいのに対し，Ｃタイプは先行発話との結束性をもたせることこそヲ格項・ニ格項を文頭に回す大きな動機である点で，Ａタイプ，Ｂタイプとは明らかに区別される。

§４　結語

本稿では典型的な主題を，「表現上の立場の部分間落差をつけて前後両項の結合として語る表現スタイルをとる際の前提的基盤項目」という「断裂要件」と，その項目が後続部分の説明対象でなければならないという「意味要件」の二つを満たすものと考えた。その上で，ある名詞句が「ハ」で表示されることと，この要件を満たすかどうかは独立である，つまり，「ハ」という助詞がただちに題目提示の助詞とは考えないという立場から出発している。このような立場にたった場合，「ハ」が用いられても主題提示ではない場合があることを認めるのと同時に，それと表裏をなすものとして，助詞なしや「ハ」ではなく格助詞で表示された名詞句でも主題提示をする場合があることを認めることになる。そのような考えに沿って，本稿ではヲ格項・ニ格項が実質的に主題として機能する場合があることを見たのである。

（参考文献）

庵　功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
大野　晋（1978）『日本語の文法を考える』岩波書店
尾上圭介（1981）「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58 巻 5 号
尾上圭介（1995）「「は」の意味分化の論理－題目提示と対比」『言語』24 巻 11 号
尾上圭介（2004）「主語と述語をめぐる文法」尾上圭介（編）『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店
菊地康人（1995）「「は」構文の概観」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
北原保雄（1981）『日本語の文法（日本語の世界 6 ）』中央公論社
久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
砂川有里子（2005）『文法と談話の接点』くろしお出版
高見健一・久野暲（2006）『日本語機能的構文研究』大修館書店
丹羽哲也（2006）『日本語の題目文』和泉書院
堀川智也（2000）「数量詞連結構文の本質」『国語と国文学』77 巻 2 号
堀川智也（2005）「「典型的な題目語」の意味的立場」『日本語文法』5 巻 1 号
堀川智也（2006）「ヲ格項・ニ格項の題目化」『大阪外国語大学論集』第 34 号
堀川智也（2007）「「対比」でも「題目提示」でもない「ハ」－万葉集の用例を中心に－」『日本語・日本文化研究』第 17 号，大阪外国語大学日本語講座
益岡隆志（2004）「日本語の主題－叙述の類型の観点から－」益岡隆志（編）『主題の対照』くろしお出版
松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店
三原健一（2008）『構造から見る日本語文法』開拓社
森重　敏（1955）「文法史の時代区分」『国語学』22 集
Chafe, W. L. 1976. Giveness, Cotrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view, in C. N. Li（ed. 1976）*Topic and subject*. Academic Press. 27－55.
Danes, F. 1974. Functional sentence perspective and the organization of the text.
In F. Danes（Ed.）, *Papers on Functional Sentence Perspective*.
Hague/Paris,Moution. 106－128.
Firbas, J. 1964. On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis. *Travaux Linguistique de Prague*, 1. 267－280.
Givon, T.（ed.1983）*Topic continuity in discourse*.（Typological Studies in Language 3）
John Benjamins
Halliday, M. A. K. 1985. *An introduction to functional grammar*. Edward Arnold
Mathesius, V. 1927/1983. Functional linguistics. In J. Vachek（Ed.）, *Praguiana:some basic and less-known aspects of the Prague linguistics school*. Amsterdam, John Benjamins. 121－142.

（2008. 12. 25 受理）